主日礼拝説教 「来て、見なければ、始まらない」予稿 日本基督教団石神井教会 2024年1月14日

【旧約聖書日課】サムエル記上 3章1~10節

1少年サムエルはエリのもとで主に仕えていた。そのころ、主の言葉が臨むことは少なく、幻が示されることもまれであった。2ある日、エリは自分の部屋で床に就いていた。彼は目がかすんできて、見えなくなっていた。3まだ神のともし火は消えておらず、サムエルは神の箱が安置された主の神殿に寝ていた。4主はサムエルを呼ばれた。サムエルは、「ここにいます」と答えて、5エリのもとに走って行き、「お呼びになったので参りました」と言った。しかし、エリが、「わたしは呼んでいない。戻っておやすみ」と言ったので、サムエルは戻って寝た。

6主は再びサムエルを呼ばれた。サムエルは起きてエリのもとに行き、「お呼びになったので参りました」と言った。エリは、「わたしは呼んでいない。わが子よ、戻っておやすみ」と言った。7サムエルはまだ主を知らなかったし、主の言葉はまだ彼に示されていなかった。8主は三度サムエルを呼ばれた。サムエルは起きてエリのもとに行き、「お呼びになったので参りました」と言った。エリは、少年を呼ばれたのは主であると悟り、9サムエルに言った。「戻って寝なさい。もしまた呼びかけられたら、『主よ、お話しください。僕は聞いております』と言いなさい。」サムエルは戻って元の場所に寝た。

10主は来てそこに立たれ、これまでと同じように、サムエルを呼ばれた。「サムエルよ。」 サムエルは答えた。「どうぞお話しください。僕は聞いております。」

【福音書日課】ヨハネによる福音書 1章35~51節

35その翌日、また、ヨハネは二人の弟子と一緒にいた。36そして、歩いておられるイエスを見つめて、「見よ、神の小羊だ」と言った。37二人の弟子はそれを聞いて、イエスに従った。38イエスは振り返り、彼らが従って来るのを見て、「何を求めているのか」と言われた。彼らが、「ラビ――『先生』という意味――どこに泊まっておられるのですか」と言うと、39イエスは、「来なさい。そうすれば分かる」と言われた。そこで、彼らはついて行って、どこにイエスが泊まっておられるかを見た。そしてその日は、イエスのもとに泊まった。午後四時ごろのことである。40ヨハネの言葉を聞いて、イエスに従った二人のうちの一人は、シモン・ペトロの兄弟アンデレであった。41彼は、まず自分の兄弟シモンに会って、「わたしたちはメシア――『油を注がれた者』という意味――に出会った」と言った。42そして、シモンをイエスのところに連れて行った。イエスは彼を見つめて、「あなたはヨハネの子シモンであるが、ケファ――『岩』という意味――と呼ぶことにする」と言われた。

43その翌日、イエスは、ガリラヤへ行こうとしたときに、フィリポに出会って、 「わたしに従いなさい」と言われた。44フィリポは、アンデレとペトロの町、ベ トサイダの出身であった。45フィリポはナタナエルに出会って言った。「わたし たちは、モーセが律法に記し、預言者たちも書いている方に出会った。それはナ ザレの人で、ヨセフの子イエスだ。」⁴⁶するとナタナエルが、「ナザレから何か 良いものが出るだろうか」と言ったので、フィリポは、「来て、見なさい」と言 った。47イエスは、ナタナエルが御自分の方へ来るのを見て、彼のことをこう言 われた。「見なさい。まことのイスラエル人だ。この人には偽りがない。」⁴⁸ナ タナエルが、「どうしてわたしを知っておられるのですか」と言うと、イエスは 答えて、「わたしは、あなたがフィリポから話しかけられる前に、いちじくの木 の下にいるのを見た」と言われた。49ナタナエルは答えた。「ラビ、あなたは神 の子です。あなたはイスラエルの王です。」50イエスは答えて言われた。「いち じくの木の下にあなたがいるのを見たと言ったので、信じるのか。もっと偉大な ことをあなたは見ることになる。」51更に言われた。「はっきり言っておく。天 が開け、神の天使たちが人の子の上に昇り降りするのを、あなたがたは見ること になる。」

「主よ、お話しください」【こども説教のために】

一人の男の子が正座をして祈っている姿を描いた絵があります。主イエスではありません。サムエルです。まだ幼く見えます。手を合わせ、虚空を見上げた姿勢で、サムエルは、どんな祈りをしているのでしょうか。

わたしたちは、祈るとき、手を組み、目を閉じていることが多いかもしれません。「手を組むのは、手が余計なものに触れないため。目を閉じるのは、余計なものが目に入って来ないようにするため。そうすれば、見えない神さまに心を真っすぐに向けることができる」と教えられたことがありました。

サムエルは、手を合わせ、目を開いて何かを見つめています。誰か目の前にいる人に向かって、必死で懇願する者のように。サムエルには、自分の祈っている相手が見えているかのようです。

「サムエルよ」と主なる神に呼ばれたとき、サムエルは、最初、それが誰であるか分かりませんでした。自分の親代わりとなっていたエリが呼んだのかと思いました。三度同じことがあって、エリは、サムエルを呼んだのが主なる神だと気づき、今度は「主よ、お話しください。僕は聞いております」と答えるように教えました。それから、「サムエルよ」と呼ばれたサムエルは、教えられたとおりに答え、主なる神の声を聴くようになりました。それがどなたか、はっきりと分かって、祈るようになったのです。

名を呼んでくださる神に、わたしたちも目を向けて祈ることができます。

「見よ」

先週月曜日の「成人の日」には、各地で「成人式」あるいは「二十歳のつどい」が催され、二十歳を迎えた青年たちの生き生きとした姿がテレビなどでも報じられていました。新年早々の大地震に見舞われた被災地でも、まだ行方不明者が多数いる中で行われた式典に参加した被災者があったことなど、報じられていました。ちょうど四年前に突如として始まった「コロナ騒動」がようやく収まったことを実感させられたのは、わたしだけでしょうか。

ここに来て、教会には、日曜日に限らず新たにおいでくださる方が増えているようです。学校の課題で来られる方もありますが、そうではなく、教会やキリスト教、あるいは聖書に関心を持ってお訪ねくださる方も少なくありません。一度限りで、お名前もお尋ねせずそのまま、という場合もありますが、それでも何かを求めておいでくださったのでしょう。求められていたものにお応えできずに、二度目に繋がらなかった方々があることは、牧師として申し訳なく思います。ただ、はっきりと何かを求めて来られた方が二度目に繋がることは、案外難しいのかもしれません。ご自分の求めと一致していなければ、当然のように、他を探し訪ねることになられるからです。むしろ、ご自分が何を求めているのか分からなくても、いつのまにか居ついていらっしゃる方は、少なくないのです。

主イエスに従うようになった弟子たちは、「わたしに従いなさい」、「わたしについて来なさい」(マタイ 4:19)という呼びかけに応じて、兎にも角にも主イエスと共に旅するようになった者たちだったと言われます。確かに、そのような呼びかけを主イエスその方から直接いただければ、後に従うようになる者は少なくないでしょう。あのサムエルのように、名を呼んでいただくのです。それが偉大なお方だと知れば、勇気をもって「はい」と答え、従うこともできるように思えます。そのような呼びかけを、主イエスから、あるいは神から直接、いただける者は、幸いです。

残念ながら、わたしは、あまりそのような霊的な経験がありません。無いとは言いませんが、とても限られています。むしろ、幼いときから、周りからいつも異口同音に言われてきたのです、「まずは、来て見なさい」と。

「ヨハネ福音書」は、他の福音書が伝えないことを伝えています。主イエスに従うようになった最初の弟子たちの多くは、主イエスから直接声をかけていただいたわけではなかった、ということです。彼らの多くは、他の人から「見よ」と主イエスを指し示されたり、「来て、見なさい」と誘われ、連れて行かれて、主イエスと行動を共にするようになった、というのです。もちろん、そうして来てみたところ、主イエスは歓迎してくださったのです。それでも、わたしは、その「誰か」の誘いが、とても気になります。

「来て、見なさい」

35年前、わたしの「成人式」は、教会の主日礼拝でした。当時の「成人の日」は1月15日の固定祝日で、ちょうどその年は日曜日に当たっていたのです。新年早々に天皇が崩御され、「平成」が始まったばかりでしたが、その年の世の中の成人式がどのような様子だったのか、わたしにはまったく記憶がありません。親からは「礼拝の中で成人祝福がある」と聞いていた記憶がありますが、教会学校の奉仕などもありましたから、特に服装を整えていったわけでもありませんでした。それでも、礼拝の中で何人かの同級生と一緒に前に立たされて聞いた牧師の声は、今でも強く心に残っています。そして、わたしはそのときから、自分が教会の人たちにずっと見られてきたことを強く意識するようになりました。

使徒パウロは、神が「わたしを母の胎内にあるときから選び分け、恵みによって召し出してくださった」(ガラ 1:15=使徒書日課)と言います。パウロがそのような自覚を持つようになったのは、いつからだったのでしょうか。わたしも、教会の仲間同士で結婚した両親のもとに生まれ、それこそ「あなたが生まれる前から、あなたのことは知っている」という先輩たちに囲まれて、教会で育てられました。けれども、わたしは、その先輩たちの教会での立ち居振る舞いを見て、良し悪しを見分けるのは自分だ、と思っていました。「見られている」ことよりも、自分が「見ている」ことにばかり関心を持っていたのです。それでも、そのような生意気な若者のことを、先輩たちは黙って見続けてくれていたと、礼拝の中の成人祝福で前に立たされながら、突然、考えるようになったのです。

主イエスの弟子たちは、自分が主イエスに出会うと、次には、兄弟や友人を誘って、「**来て、見なさい**」と呼びかけました。なぜでしょうか。彼らは、主イエスを見ようとする自分たちのことを、主イエスもご覧くださっていることに気が付いたのです。「この人は、いったい誰だろう。預言者か、教師か」と、主イエスのことを見極めようと近づいてきた弟子たちに、主イエスは眼差しを向けられていました。見つめていらっしゃいました。弟子たちは、そのことに気づいたのです。「このお方は、自分のことを見ていてくださる」と。

「見る」ことは、「出会い」の始まりです。だから、「見る」のです。「見る」ように誘います。その人が、「見られている」者として立ってくれるように。主イエスが弟子たちにそうしてくださったように、弟子たちは、教会でそのように、人々を「出会い」へと誘ったのです。

主イエスと出会い、神と出会い、互いに「神の子」として出会う。見なければ、始まりません。すでに見てくださっているお方の眼差しの中に立ち、見られている者として、「出会い」を始めるのです。